

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小野 道子

小野道子氏の論文『カラーチーの「ベンガリー」—D地区の「路上」から考える「女の子の安全保障」—』は、パキスタン・イスラム共和国カラーチー市に居住する政府統計には表れない人々に関わる考察である。「ベンガリー」と呼ばれる、それらの人々のうち、「路上」で物売り・物乞いをする女の子と、その母親たちが主たる考察の対象である。不法移民や無国籍者として社会的制度から排除されている女の子たちや母親たちが「路上」に生きる背景と向き合っている現実を分析し、当事者たちの視座に立った「安全・安心」のあり方について人間の安全保障の観点から追究がなされる。

本論文は、序章、第1章から第7章、終章という構成からなる。序章では論文提出者と「ベンガリー」の子どもとの出会いや、「路上」に生きる「ベンガリー」の娘と母親の視座から考える一人ひとりの安全・安心をとりあげる背景が述べられる。

第1章では、先行研究を整理し1)人間の安全保障における、個々の安全・安心に関する視座、2)英領インド時代から1990年代に至る「ベンガリー」ディアスポラの歴史的過程、3)「ストリート・チルドレン」研究とは一線を画す、子どもや母親たちの居場所としての「路上」、といった3つの分析視角を提示し、2017年以降4年間の間に断続的に8回に及ぶフィールドワークを伴った提出者自身による研究調査活動の概要が述べられている。

第2章では、「人間の安全保障」論が、国家よりも人間の安全保障を優先する議論とされ、この議論においては脅威や不安全の分析が有効とされるが、本論では個々人が何を安全・安心と考えているかを考える必要があるとする。さらに、その考察において人間とは誰を、安全・安心とは何を意味しうるのかを論じることの重要性が述べられる。

第3章では、英領インド時代から1990年代後半に焦点をあて、パキスタン、バングラデシュ（旧東パキスタン）、ミャンマーのアラカン地方における国内および地域状況の変遷を踏まえ、ベンガル人やバルミー／ロヒンギャの移住の過程が述べられる。センサスや文献からの客観的なデータと現地調査で収集した「ベンガリー」の人々の「語り」が交錯するところから紡がれる人々の移住の歴史を描くことが試みられる。

第4章では、現在の人々の暮らしについてナラティブを導入しながら考察が展開される。「ベンガリー」の多くが住まう道路沿いの不法占拠地での暮らしには永久的な保障はなく、政府による取り壊し、意図的あるいは自然発生的な火災、土地の所有者たちによる恐喝など、生活を脅かす多様な現実が示される。加えて、市民権を保障するはずのIDであるCNICやパスポートも、更新年毎に出生証明書などの書類を用意し、賄賂を支払う必要が生じることも示される。そうした暮らしを余儀なくされる人々が、流動的な情勢を見極めつつ自分たちの生活基盤をより強固なものにしようとする姿が臨場感をもって描き出される。

第5章では、「路上」で働く「ベンガリー」の子どもたちが議論される。「ストリート・チルドレン」の定義について、時代による変遷とともに概観される。カラーチーの「路上」で働く／生活する子どもたちの実態については、NGO 団体等による先行調査結果を参考に明らかにされていく。男の子は、家庭内での暴力や親の再婚による家庭不和などを理由に家出のような形で「路上」に出てくることが多いこと、その一方で、女の子は、家庭の生活困窮のために、食べていくために仕方なく「路上」に出てくる人が多いことが示される。

第6章では、カラーチー市内のD地区Gマーケット周辺に集う子どもと母親たちに焦点を当て調査をした結果が示される。D地区Gマーケットに通ってくる子どもと母親は、貧困や生活困窮ゆえに仕方なく「路上」に出てきた女の子と母親の組み合わせが多いことが論じられる。D地区に通うようになったのは切実な理由からだが、長年通っている子どもや母親たちは、D地区に来ることをポジティブにとらえている様子も描き出される。

第7章では「ベンガリー」という名乗りと名付け、「路上」が意味するもの、「ベンガリー」の女の子たち、母親たちにとっての安全・安心な居場所としての「路上」という3点から、「ベンガリー」の女の子たちの安全保障について議論が深められる。さらに、ミシェル・ド・セルトの「戦術」と「戦略」の概念を援用し、社会の「戦略」の隙をついた人々の「戦術」によって、「安全共同体」が作られ人間そして女の子の安全保障が達成されると述べる。

終章では、「ベンガリー」の子どもや母親たちが、「人間の安全保障」の観点から脆弱な対象としてだけでなく、レジリエントに生きる主体として描き出すことも可能であるという結論が示される。その上で提出者は本論の学問的貢献が、南アジア地域研究、文化人類学そして人間の安全保障の3つの領域に及ぶことを論じた。さらには今後の課題としてディアスポラ研究としての意義をより正確に見定めることと、「路上」で働く子どもにより焦点を当てることを示唆した。

審査会では、提出者による「ベンガリー」という範疇、およびディアスポラ概念の運用の仕方、あるいはウルドゥー語の表記法に関し、問題点が指摘された。また、ナラティブの収集に関してはより広い角度から調査をすること、より広い社会制度的な構造に対する言及も可能だったのではないかという講評もなされた。さらには、本論で展開されているD地区の「路上」の実践における様々な発見を戦術・戦略の理論的枠組みや人間の安全保障論から総論的につなぎ合わせ、本論全体を包むような考察に導くことへの課題が残されたことも指摘された。しかし、南アジア地域研究において、未だあまり解明されていないパキスタンのベンガル人およびバルミー／ロヒンギヤの人々に関わる考察としての独自性やイスラーム社会における女性と子どもの安全保障を取り上げた希少性とその主体性に光を当てる新規性に鑑みると本論でなされた試みは高く評価することができる。ゆえに、前述された様々な問題点は、本論全体の価値を損なうほどの瑕疵ではなく、人間の安全保障論が目指す課題解決に向けての脆弱とされる者の理解に資する実践的価値が高いことも確認された。

したがって、本審査委員会は、審査委員の全員一致で、博士（国際貢献）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。